



“いっばしの顔” の子どもたち

松本 侑壬子・ジャーナリスト

千葉県木更津市にある里山で、毎週土曜日に小学生を対象に「土曜学校」が開かれている。もともとは、70年の伝統をもつ木更津社会館保育園の学童保育「ポプラクラブ」が、学校週休2日制に対応して2002年から始めた学校だという。これは2008年4月から14ヵ月、里山という学びの場を追った長編記録映画である。

広大な里山一帯には山や林ばかりでなく、川も沼も畑も荒地もある。子どもらは朝と夕方といった“基地”とも言える建物に集まるが、後は自由にこの大自然の中に“放牧”される。一人でも集団でも、どんな遊びをしても自由。遊びの途中で喧嘩もあればいじめにも遭うが、自分で何とかしなければならない。泣いて先生に訴えて、悪い子を叱ってもらうのは、なし。

もちろん画面をよく見ると、しかるべきところにちゃんと大人の姿がある。しかし、みんなを集めて集団指導をしている様子はない。それどころか、(失礼ながら)まるで風景の一部と化し、畑仕事をしたりモノを作ったり、それぞれが自分の仕事に没頭している。子どもらが興味をもって質問すれば、やり方や基本技術を教えたり、昔の話をしたり、自分の今やっていることを説明したりしてはくれる。が、自分から子どもを集めて授業のように教えはしない。子どもらは知りたいことを大人から聞き出し、それをどう

生かそうが勝手である。聞きっぱなしでもOKだ。試験なんかないから。

泥んこ遊び、池の周りの水遊び、自然木で作る工作アート。薪を燃やして料理を作り、みんなで食べる。湿地を造成して見事な水路と回廊式庭園を造り上げた少年グループ。逆に、一人でこつこつと畑を耕し、何種類もの野菜を育てる少女も。豊かな収穫もあればうまくいかないものもあって、自分でつくづくと観察し、大人に聞いたり調べたりして原因を突き止める。考えながら低い声で作物の説明をするその顔は、もういっばしの畑の専門家だ。

そう、この子どもたちには“いっばしの顔”が多い。そんな顔を見せる瞬間がある。好きなことに存分に浸りきって、時間を過ごすことほど満足なことがあるのか。見ていて本当に羨ましい。ふり返れば、それなりにワーク・ライフ・バランス人生を突っ走ってきたけれど、それはそれでやり甲斐もあり面白くもあったのだけれど、いつでも心の底には「好きなことに思う存分没頭してみたい」との願いがあった。だから今、それを体験している畑の少女や泥まみれの少年たちの、やり遂げた“いっばしの顔”に心からよかったね、と言いたい気持である。

すばらしい子どもたちであるが、その陰には手出しをせずに風景となり、背中や耳の裏側で子どもたちを見守っている大人(指導者)たちの存在がある。どんなに元気な子どもたちでも、“自然そのもの”の中に放り出してこの豊かな経験が得られるものではない。守りながら放任する。このバランスを自在に操るだけの経験と知恵が、この学校を継続させ、子どもたちを引きつけてやまないのであろう。

改めて教育とは、と考えさせられた。

『里山の学校』

日本映画(103分)／原村政樹監督

上映情報：(株)桜映画社 HP <http://www.sakuraeiga.com>

© 桜映画社

